



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065
 編集 早川 清志
 題字 島崎 洋路

通年コース第十五・十六回開催報告

「炭焼き・きのこ菌打ち・間伐」

『失敗か成功か、消し炭の完成』

農林水産省のホームページの中に特用林産物生産統計というものがあります。林業の範疇で、丸太(素材)と緑化木以外の生産動向を表した統計で、きのこ類やわさび、ワラビなどの山菜やくり、くるみなど木の実、キハダやオウレンなどの薬草、竹の子、ウルシや精油、炭、薪などの生産状況を示した表です。例えば平成22

年のマツタケの生産量は全国で140トン、うち長野県は85トンでダントツ1位でした。今回のテーマである炭の生産量は平成22年で白炭、黒炭、竹炭、粉炭合わせ、2万6000トン弱となっていました。燃料革命の始まる前、昭和20年台には260〜270万トンほどを生産していたという記録があり、これは現

在のちょうど百倍程になります。一昨年に亡くなった作家、井上ひさしの「新釈遠野物語」にも、釜石の山間の診療所から対岸の山を見ると、そこかしこに炭焼き窯の煙が昇っている、という描写があります。炭は煮炊き・暖房用の資材としては、石灰の粉を固めた練炭に肩を並べる重要なエネルギー源でした。岩手県は現在でも500を越える窯を擁し、年間4000トンを生産する全国一の炭どころですが、量的には往時の足元にも及びません。では今、国産の炭は幾らく

見ると、黒炭の生産者出荷価格は平均で127円/kgとなっています。夏にホームセンターで、中国ナラとか、マングローブ炭などという輸入炭を良く見かけます。そしてこれらの輸入価格は平均して71円/kgです。日本ではブランド化を図った、特徴のある炭を作らないと輸入炭には太刀打ちできません。そんなこんなで、平成22年の炭の自給率は、木材自給率と似たり寄ったりの28%となつています。どうやら炭にして売るより、その手前の薪で売った方が日当が稼げそうだ、というのが日本の現状です。

さて、森林塾に集まってくださる塾生の皆さんは、そんなコスト計算をしない上に、手間暇を厭いません。今年もニコニコと炭焼きが始まりました。信州大学からお借りした移動式炭化炉に、塾で伐倒したスギの炭材330kgを詰めした後



煙道となる柴を立て、炭材を詰める



今年の最遠距離参加は蔵前のお師匠さん、点火の統計で



順調に火が回り上蓋をする



パチパチの音の後、火が噴出す。集中夏参加の西野さんもジビエ料理持参で飛び入り参加。こっつあんでした。

食後

移動式炭化炉の説明の後、炭材を詰めて、点火。折角だからドラム缶で竹炭もと、板山さんが自宅から竹を持ってこくる。節取りが面倒なのでこちらは丸のまま詰めて点火。

一日目

炭焼き・茸菌うち・間伐

通年コース第15・16回

11月30日12月1日(金・土)

断を待つ事にしましょう。

この菌うち、品種は自然状態での収穫が期待できる森産業の290です。原木は30本ほどなので、一時間ほどで終了。続いて島崎先生の「森林評価学」の講義。相当に難しい。



最長老の板さんは窯奉行

4時過ぎに信州大学森林科学科教授の北原先生がお見えになり、金曜サロンが始まる。森林の公益的機能の大きさを、実際の実験や観察で調べその結果を分かりやすく説明してくださいました。「これから山林整備、頑張れよ!!」、と背中を押してもらえらる講義でした。

スギも竹も順調に炭化が進み窯止めし、忘年会に突入。お酒や肴、多くの差し入れありがとうございました。集中夏参加の西野さんもジビエ料理持参で飛び入り参加。こっつあんでした。



勇気をいただけた講義でした

二 日 目

朝一番、期待を込めて炭化炉の蓋を開けたらパチパチパチと音がする。しばらくして火が吹き上がり、バケツリレーをしたが、追いつかないので水道で放水。目地止めが不完全だった様です。大方は炭化していましたが、すべてが消し炭になってしまいました。でも乾かせば、十分使えます。計量は無意味かな。

さて今日は間伐の復習。横山の現場で2班に分かれて伐倒練習。4時終了、菌を打った原木や消し炭を持って解散。

参加者/飯塚さん、和泉さん、板山さん、大澤さん、金子さん、小林さん、高橋さん、藤田さん、湯沢さん、水野さん
講師・スタッフ/島崎先生、川島、松岡、早川
金曜サロン/北原先生

専門コース第三回開催報告

『小道具を知り、的確に使いこなす』

今、日本の林業の趨勢は高性能林業機械を駆使して、大規模に、より安全で高効率の仕事をしよという方向に向かっています。もちろんこれはこれで間違っていないと無理なのか、などを決めるのは最終的には場数ではないかと思えます。樹木の太さや高さのほか、風向きや時期、樹種などいろいろの要素を勘案することも大切です。

真冬の三日間、横山のアカマツ・サワラ林で各種道具を使って山側に倒す実践を行いました。今年度最後でしたが、皆さん随分上達されました。三日目の雨の日はチェーンソーに関する講義もみっちり行うことが出来ました。これでマイチェーンソーのメンテは万全ですね。

それぞれの小道具には長所、短所があり、また、大きさ、あるいは太さで能力が異なります。これから倒すうとする木はどんな能力のどの道具を使えば倒せるかを、事前に判断する必要があります。特に重心と逆方向に倒したい場合、この大きさのクサビで起こせるのか、あるいはロープか、いややはりチルホールで引かないと無理なのか、などを決めるのは最終的には場数ではないかと思えます。樹木の太さや高さのほか、風向きや時期、樹種などいろいろの要素を勘案することも大切です。

向に倒したい場合、この大きさのクサビで起こせるのか、あるいはロープか、いややはりチルホールで引かないと無理なのか、などを決めるのは最終的には場数ではないかと思えます。樹木の太さや高さのほか、風向きや時期、樹種などいろいろの要素を勘案することも大切です。



クサビでアカマツを山側に倒す

村さん、松本さん、水谷さん、矢崎さん、吉柴さん、講師・スタッフ/小泉、松岡、早川

専門コース第三回開催
12月13日、15日(木・土)

参加者/伊藤さん、杉江さん、武田さん、藤田さん、東村さん、松本さん、水谷さん、矢崎さん、吉柴さん、講師・スタッフ/小泉、松岡、早川

安全衛生教育講座の開催

11月16日(金)、12月2日(日)、7日(金)に労働安全衛生特別教育の「伐木造材・刈払機取扱作業教育」を開催しました。

伐木造材教育には24名、刈払機教育には11名の方が参加してくださいました。いつもは現場で実践中心の森林塾ですが、この日だけは朝から教科書に沿って座学。講義の内容は、「作業に関する知識」、「機械に関する知識」、「振動障害および予防のための知識」、「関係法令」、「災害事例」などで、理論と実践が結びついたとの評価を参加者からいただくことができました。

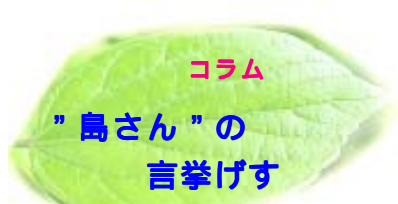
この教育の修了証は免許や資格ではありませんが、全国共通の教育目安の指標となります。来年度も開催予定ですので、塾OB・OGの方で受講ご希望の方は事務局までご連絡ください。

今年度の最終回です。チェーンソーによる伐倒技術をしっかりと自分のものにしてください。この時期道路の凍結の可能性がありますので、時間に余裕を持って山小屋にお集まりください。

通年コース第17・18回
25年3月1、2日(金・土)

間伐の復習、終了式

今年度の最終回です。チェーンソーによる伐倒技術をしっかりと自分のものにしてください。この時期道路の凍結の可能性がありますので、時間に余裕を持って山小屋にお集まりください。



No.10 「里山の小規模山林所有者はどうする？」

果たしている。保有規模別の林家数の統計値は表のよう、この表からただでも幾つかの課題が読み取られる。例えば、個人有林の比重が思いのほか高い(あるいは低い)、林家総数は全世帯のわずか2〜3%にすぎない、森林の保有規模が零細である。(1〜5haの林家が75%、5〜10haが13%、合わせて88%)等。また平成22年に農林水産省が実施した「林業経営に関する

戦後林政の転換期を迎えた昨今、国は「森林・林業再生プラン」を策定し、手遅れにしている森林の整備を促しながら10年後頃には国産材の自給率50%を目指すなど様々な施策を講じようとしている。しかしながらその骨子である施業の集約化や路網の整備・機械化の立ち遅れ等により林業の採算性は厳しさを募らせており、必要な森林整備が継続できない恐れさえ危ぶまれている(平成24年版 森林・林業白書 第4章)。

(表) 保有山林規模別林家数(2010年)

保有規模 (ha)	1 ~	5 ~	10 ~	50 ~	100 ~	~
総数 91 万戸	68.1	11.9	9.7	0.7	0.3	
100%	75	13	11	1	-	

全国総世帯数 4997 万世帯(2008 年)
林業経営体数は約 14 万(法人、非法人合わせ。2010 年)

る意向調査」によると、保有規模が小さい林家ほど、施業に対する意欲は低い傾向にあり、今後5年間に於ける森林施業の実施に関しては、保有規模1〜20haの林家の69%が「施業の必要な山林はあるが、実施する予定はない」と答えている。また、今後の林業経営の意向に関しては、78%が「山林は保有するが、林業経営を行うつもりはない」と答えている。

ならない
 ^ 島崎 洋路 ^

一年前、私はグラフィックデザインの仕事をしていた。その時分、現在の仕事に就くなんて想像もしなかった。現在私は、企業のCSRを担う部署で緑地管理の仕事をしている。



このように、小規模林家の森林施業および林業経営に対する意向が低調な理由としてはいろいろ考えられるが、この意向調査では林業の採算性が低いことが挙げられている。現存の里山林の多くは、戦後の旺盛な木材需要を充たすための広大な伐採跡地に再生(人工・天燃の割合は6対4くらいか)してきた林分で、本格的な成熟期を迎え始めており、持続的に木材供給が可能な森林蓄積はほぼ十分に整えられてきているにもかかわらずである。

1970年代以降、安価な外材供給への依存度を大幅に高めたこと、未成熟な間伐材への需要や価格が長く低迷してきたこと、またここ数十年来国産材の想定外な下落(供給過剰が主な原因)など、里山の森林所有者などには対応不可能な事由が積み重なってきているにほか

CS Rと言うと高尚なものに聞こえるが、私の仕事は所謂現場仕事で一日中雑木林の中にいて、園路を作ったり、植樹したり、蔓や笹と格闘し、時には蜂に襲われ、除草作業では腰が悲鳴をあげ、信じられないくらい重いコナラの幹を人力で運んで、毎日たくたくに疲れている、と愚痴っぽくなってしまったが、私はこの仕事を気に入っている。きつい仕事でも何故こう思えるかと言うと、自然の中で体を動かすのは清々しいし、それに樹木が好きだったからだと思う。

樹木と親しかったころ頃を思い出す。



東京の西部生まれ、都心から程よく離れた田舎とでも言おうか、子供が遊ぶには充分な自然があった。小さなスパーに続く道には桜並木があり、僕の住む薄汚れた団地29号棟その次30号棟には親友がいて、その狭間の小さな緑地は最高の遊び場だった。今思い返しても不思議な掘建て小屋があり、その脇の斜めに伸びたシダレヤナギからよく屋根に飛び移った。道沿いのツツジは花が咲けば丸坊主になるまで密を吸い尽くした。ヒマラヤスギが一番の高木で、子猫が登って降りられなくなっているのを見つけ親友と救出してあげた。あれはヤブツバキか、照葉樹の中は最高の隠れ場だった。自転車置き場の裏に林立した木はサンゴジュで間違いなく、真っ直ぐに伸びた枝を切り樹皮を剥ぎ木刀に仕立て宝物のように大切にしていた。これを作った直後、車に跳ねられる不運に見舞われるが、病室のベッドで目を覚ました時、うわ言のようにこの木刀のことを気にしていたという。あと、草おじさんも忘れ難い。一年中常緑樹の枝を集め回っている人だ。いつも大量の枝を脇に抱えて歩いていた。不思議ではなかった、その集めた枝をどうしているのかなんてそんな野暮なことは誰も言わなかった。あの姿は、地域の風景に溶け込んでいた。日が暮れて友達が帰った後もよく一人で樹上にいた。真っ赤な空の中、樹上にいた。

今、仕事ではこの時のような樹木との交歓はできていない。

伐採をする時、チェーンソーを幹に刺し込む時、まだ未熟な私は受け口を作るのに精一杯だが、何とか伐倒して倒れた木を見て思うことは、雑木林の過酷な生存競争に勝ち残り成長した木の15〜20年を僅かな時間で奪う後ろめたさだ。緑地管理というところの一方的な理由で切り倒される

木は無念だろうが、「僕も生きるため、飯食うために君を切っているのだ、堪忍なァ」と心で思ってみても、「僕の生きるため」は間接的すぎてどこかフェアじゃない。だからせめてあの頃のように木と親しく、木を敬う気持ちを保持していたらと思った。自分一人を取り戻せない気持ちと木と真摯に向き合う人達から学ぶためKOA森林塾にお世話になった。実習を行なったヒノキの森は獣的な雑木林と違い、整然として美しかった。

歴とした伐倒技術は、僕の求めるものだった。自分の技術を補うためこれからも通いたい。実習中切り株に枝を飾る受講生がいた。後で知ったことだが、木に対して謙虚に感謝を現すKOAスタイルだとか。学びに来て本当に良かった。

森林塾後に始めた事がある。ツリークライミングだ。ロープを枝に掛け、そのロープをつたって樹上に行く遊び。ロープワークも見た目より簡単に幅広い年代の人達が楽しんでいる。都内では木に登れる機会は限られているのだが、先日初めて15mぐらいのケヤキの木にエントリーした。憶えたての技術を駆使し、懸命に登った。樹上でぶら下がる心地良さはあの当時に繋がっている。まだ

見ぬ自分の子供と一緒に登ることができれば素敵なことだろうと、柄にも無いことを考えワクワクした。目下ツリークライミングの技術を上げていく事が私の目標になっている。

私と樹木の関係を修復しようと考え動きだしてから、ゆっくり何かが動き出したように感じる。久しぶりに仕事帰りに当時の面影をとどめないあの団地跡に行ってみようと不意に思った。再開されたその町には、ランドマークのヒマラヤスギはもろろ無い。人気のあるサクラは残されていたが、高層マンションに見下ろされ桜並木はどこか情けなかった。刷新された街を通り抜けた時、信じられない光景を見た。常緑樹の枝の束を脇に抱えた白髪の老人が道路沿いの緑地帯を忙しなく歩いていった。草おじさん仲間いない。あの人は20年以上も…。目頭が熱くなるのを感じた。

私も未永く、今の気持ちを維持し働きたい。コナラの切り株から萌芽更新の孫生えが遅く成長するには20年ぐらいかかるだろうか。数十年というスケールに怖気付きそうになるが、日々移ろい行く自然の中で自分のできる事を精一杯やりたい、ひたすらに。



リレー通信

たまたま!!が重なって 門脇 洋子

もともと木や木製品が大
好きだったけれど、学生時代
に十日町で木挽き職の民具
を見た時から、木にまつわる
伝統的な仕事に関心が向き、
古民家の保存や、建築の勉強
会に出たりしていました。昨
年春に、田中優さんの講演会
で、素人でもできる「皮むき
間伐」という方法に出会っ
て、十日町の地域おこし協力
隊の仲間と小さなグループ



を立ち上げ、地域の森に入り
始めたところです。

豪雪地帯の十日町では、森
に入る事ができる期間が
限られています。この10月に
は市民協働の森づくり実行
委員会が、ブナの市民植樹を
始めたり、水沢地区の中学校
では、学校林を保全する活動
が、もう30年も続いていた
り、色々な芽はあるのです
が、ほとんどの人工林は手つ
かずで、うっそうと茂った暗
い杉林が広がったままです。
そこに昨年、長野県北部地震
(3/12)と集中豪雨の水害
(7/29)が起きました。十
日町市には、なんと1年に2
回も「災害救助法」が適用さ
れるほどの大きな被害が出
たのです。暗い森が保水力も
失っている、これはこのまま
見過ごせない、といういろな
講習にアンテナを張ってい
たところ、「KOA森林塾って

いいみたいよ。もう500人
以上も卒業生を出してるら
しい」と聞いて、ぜひ一度
行ってみなくては、と参加さ
せていただいた次第です。

皮むき間伐ではなく、そも
そも通常の間伐はどうやる
のかな?と調べていたので、
集中コースの研修がとって
も楽しみでした。でもまさ
か、自分でチェーンソーを使
い、直系30〜40cmもある立派
な樹を、なんと2本も伐採す
ることになるとは思っても
いませんでした。たまたま今
回の参加者が5名だったの
で、すぐに順番が回って来た
ことはラッキーでした。不慣
れな生徒にも容赦なく、「は
い、それではやってみましょ
う」とインストラクターの早
川さん。穏やかな表情とすば
やい身のこなしで、一本一本
違う樹木の状況に的確に対
処し、指示する様子は恰好い
いですねえ。でもついて行く
のがやっとなかったので、もっ
ともつとたくさんさんのことを
教えてもらったはずですが、
わずかなことしか覚えてい
ません(すみません!)。

危険」とか、「斜面で玉切り
するなら、上側に回る方がい
い」とか、「根張りのある樹
は、受け口の両端を少し斜め
にカットする」とか、その
場面の情景がすぐに目に浮
かんできます。ただ、樹の重
心がどこにあるか、何度眺め
てもあまり良くわかりませ
んでした。左右だけでなく、
前後も見なくてはいけない
からなのか? ヤマ勘で、
「こっちはです」と適当に答え
てしまった気がします。

チェーンソーの扱いも、自
己流とは違って、前後に動か
さず、自重でまっすぐ下に降
ろしていくように切るのは、
新鮮でした。鋸のように前後
に動かしてしまっていました
が、そうではないとのこと
と。それを覚えて帰ったら、
我が家の安物のチェーン
ソーでは、途中で切れなく
なってしまう、困りました。
まだ生きているみずみずし
い立木と、乾燥が済んで固く
なっている古民家の廃材と
では違うからなのか、理由は
わかりません。エンジンを起
動した時も、ぶるぶる振動が
ひどくない、いいチェン
ソーが欲しいなあと思いま
した。研修では確かプロ仕様
を使っていたはず(値段の違
いは、性能にはつきり出るん
だなあ...)

たま!! がありました。

その(1) 宿泊した山荘ミル
クのママが、たまたま私
の実家のある宇都宮で、
食についての講演をされ
たばかりだったこと。

その(2) 山荘ミルクは、そも
そも森林塾スタートの
きっかけの宿だったこと。

その(3) たまたま最初の日
だけ、お客が自分一人で
じっくりママの話が聞け
たこと。

その(4) 鳥崎先生が、たまた
ま研修の交流会にも合流
され、貴重なお話を伺う
ことができたこと。

その(5) たまたま浜田久美
子さん(森林塾卒業生)の
本を持っていたこと。

その(6) たまたまチェン
ソーの座学講習の企画が
持ち上がったという時期
だったこと。

その(7) たまたま道路に出
てきた猿の集団に出くわ
したり、熊の木登りの爪
痕が見られたこと。

その(8) 伐採研修の二日間
とも、お天気に恵まれた
こと

その(9) ほんとはこの通信
を書くはずだった方が辞
退され、私にお鉢が回っ
て来たこと。

なかでも、最大の たまた
ま!! は、その(4)の鳥崎先生
のお話です。志願せざるを得
ない雰囲気の中、盛大に出征

したのに、視力が悪かったた
め軍隊をすぐ除隊になっ
てしまい、林学を学ぶこと
になったことでしょうか。そう
でなければ、「保存木マーク法
も、「列状間伐」という考え
方も生まれずに、日本の林学
はどうなっていたことか...
目を丸くして先生の話に聞
き入る松岡さんの様子が印
象的でした。今もなお、まず
森のプロが育ってほしいと
語る先生の熱気に、みんな
感じ入りました。皆さま、こ
れからもどうぞよろしくお
願いします。

おわりに

「門松は冥土の旅の一里塚
めでたくもありめでたくも
なし」という有名な歌は一休
さんが詠んだと伝えられて
いますが、「だからもつと楽
しく、自分らしく生きなさい
よ」と諭してくれているの
もしれません。

早いもので今年残すは数
日。4月に始まった塾も通年
コースのあと1回のみ。良い
お年をお迎えください。

投稿大歓迎。ご意見ご質問
は早川・松岡(事務局)まで
お知らせください。
TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail:
mi-matsuoka@koanet.co.jp
ki-hayakawa@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062(開催日)
URL http://www.koanet.co.jp